

ラピタ土器文様の変遷

著者	酒井 中
雑誌名	金大考古
巻	44
ページ	1-2
発行年	2004-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2297/2934

金大考古

第44号

修士論文概要

「ラピタ土器文様の変遷」

酒井 中

本稿の目的はラピタ土器の文様の変遷過程の解明である。土器文様の分析に先立って放射化年代測定資料のコンテキスト、遺跡の立地、遺物の出土状況の検証をおこなった。海岸付近で発見されることが多いラピタ遺跡では、層位的に恵まれた事例は極めて稀であり、層位的に遺物の変遷を追うことは出来ないのが一般的である。そのためラピタ文化の編年・拡散モデルは放射化年代測定値にもとづいて構築されているが、検討の結果、土器の年代を直接的あるいは密接に結びつく資料はほとんど見られない。遺跡の層位的状況・立地環境からも遺跡間に見られる測定値の差が遺物の新旧関係を反映しているとは考えにくく、確実な一括廃棄資料も1例しか存在しない。

本稿では「人面文様」、「口唇部端面の文様」、「レリーフ文様」について文様構造の型式分類を行なった。文様は構造的、技術的な要素単位に分解し比較したところ、同じ文様、施文部位においても、技術的な違いが生じることが伺えた。

設定した各文様型式は分布状況、西古東新の傾向を見せる放射化年代測定値、簡素化の流れに基づいて文様の変遷過程

を6段階に区分した。その結果、ラピタ文化の拡散は西から東への単純な漸移的拡散ではなく、リーフ/サンタ・クルーズ諸島からフィジー、トンガへの拡散が比較的早い段階でおこなわれ、その一方、リーフ/サンタ・クルーズ諸島、ニュー・カレドニアからフィジーへの進入時期についても時期差があるという理解に達した。



ヤヌザ遺跡出土 皿（筆者実測）